

一 般 演 題 抄 録

11. WPW 症候群に対するカテーテル焼灼術の1例： 当科における頻拍性不整脈に対するカテーテル焼灼術の成績

高井博之 片山克彦 愛田良樹 唐崎専也 伊澤 弘
藪下博史 赤松幹一郎 塚本哲也 石川欽司
近畿大学医学部第1内科学教室

症例は31歳女性、幼少時より頻脈発作を認めていたが発作頻度低いため無治療で経過していた。しかし最近になり発作の頻度及び持続時間ともに増加し、平成9年5月頃には連日発作を繰り返すようになったため、当科受診した。入院後カテーテルアブレーションを行い左側後側壁にある KENT 束を焼灼し以後頻脈発作の再発は認められていない。

近年 WPW 症候群を始めとする上室性頻拍性及び、心室頻拍症に対する治療として、カテーテル焼灼術（カテーテルアブレーション）が改良され盛んに行われるようになった。第一内科においては、平

成6年より WPW 症候群に対しカテーテルアブレーションを施行して以来良好な成績を得ており、平成9年11月末までに WPW 症候群19例、房室結節リエントリー性頻拍4例、心房内リエントリー性頻拍1例、心房粗動2例、心室頻拍1例、計27例に対しカテーテルアブレーションを施行し24例に成功を納めている。再発例は3例に認めたが、そのうち2例においては心電図上デルタ波を認めたのみであり、頻脈発作は認めていない。合併症としては心タンポナーデを1例、III度房室ブロックを1例認めたが、いずれも予後は良好であった。

12. RA 滑膜線維芽細胞におけるブラジキニンレセプターサブタイプの検討

福岡 宏 宗圓 聰 藤田昌彦 岡本佳之 西坂文章 田中清介
近畿大学医学部整形外科学教室

目 的

RA 患者滑膜線維芽細胞に対するブラジキニンの作用をブラジキニン B1・B2 レセプターについて、細胞内カルシウムイオン濃度・細胞内 pH とヒアルロン酸放出を指標に検討することにした。

方 法

人工関節置換術時に採取した RA 患者8例の滑膜組織を継代培養して実験に用いた。細胞内カルシウムイオン濃度および細胞内 pH の測定は、細胞内に Fura-2 AM と BCECF-AM を取り込ませブラジキニン 10^{-7} ~ 10^{-5} M の各濃度にて刺激した。その細胞内カルシウムイオン濃度・細胞内 pH の変化を蛍光顕微鏡画像解析装置 (Arugus-50) にて観察した。またブラジキニン B1・B2 レセプターアンタゴニストをそれぞれ前投与し、15分後にブラジキニン刺激を加え細胞内カルシウムイオン濃度・細胞内

pH の変化を経時的に測定した。ヒアルロン酸の測定はブラジキニン各種濃度にて48時間刺激し培養液中に放出されたヒアルロン酸を、また、同様にブラジキニン B1・B2 レセプターアンタゴニストを前投与し、ブラジキニン刺激を加えて Sandwich binding protein assay 法を用いた測定用キットを使用し測定した。ヒアルロン酸放出量を測定した。

結 果

ブラジキニン刺激により、濃度依存性に細胞内カルシウムイオン濃度の一過性の上昇と細胞内 pH は上昇低下するといった反応が認められた。ブラジキニン B2 レセプターのアンタゴニストを前投与するとその細胞内カルシウムイオン濃度・細胞内 pH の変化は抑制された。またヒアルロン酸の放出もブラジキニン刺激の濃度依存性に低下するが、ブラジキニン B2 レセプターのアンタゴニストを前投与すると元のレベルにまで回復した。